

まほろん

通信

2020

春

VOL.75 号

◇特集1◇

エピソードと木簡

◇特集2◇

実技講座『大堀相馬焼に挑戦』

■シリーズ収蔵資料紹介 31■

特別な？火おこし道具

■コラム■

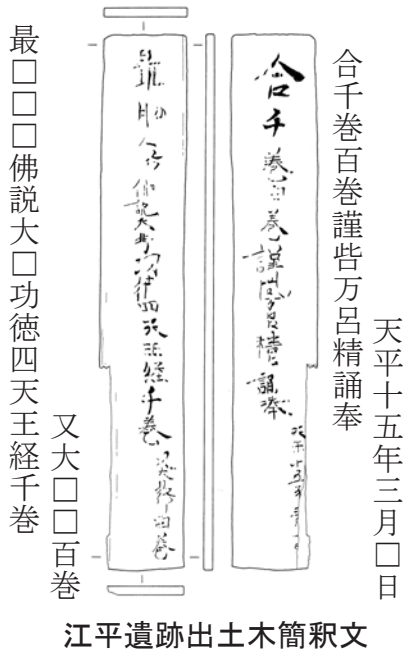
電気がない時代の家にミニ行灯を灯して



エピソードと木簡

「江平遺跡出土木簡」から 昨今の世相を思う

文：笠井 崇吉（専門学芸員）



わされた外交使節団が、天然痘に罹患したまま都（奈良県）に戻りました。

当時の日本に、天然痘の免疫を持つ人など、ほとんどいませんから、翌天平9（737）年には、流行が全国に波及しました。一説には、当時の人口の3割が失われたといわれます。

まほろんの収蔵品に、「江平遺跡出土木簡」という、文字が書かれた奈良時代の木の札があります。玉川村にある、江平遺跡の沢跡から見つかりました。

木簡には、皆万呂という人物が、国を安定させるお経千百巻を熱心に唱え、天平15（743）年の3月に読み終えたことが記されています。この文章だけ見ると、東北地方の片田舎に住む皆万呂さんが、一生懸命お経を唱えただけに思えますが、実は皆万呂さんがお経を唱えた背景には、古代の日本を揺るがした大惨事があるのです。

事は、皆万呂さんの読誦終了から8年前に遡ります。天平7（735）年、大陸との玄関口であった北九州に、日本にとっては、ほぼ未知の感染症である天然痘が上陸し、たちまち感染が広がりました。そんな最中、折から関係が悪化

していた
しらぎ
新羅に遣

天然痘の猛威は、当時政権の中心にあった藤原4兄弟（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）の命も奪い、藤原氏は、中央政界で勢力を失いました。このことが面白くない藤原広嗣（宇合の長男）は、天平12（740）年に九州で反乱を起こしました。広嗣の乱自体は、翌年には鎮圧されて、広嗣も斬られましたが、時の首長であった聖武天皇は、焦りからか、複数回の遷都や仏教にすぎる政策を進めて、官民を混乱させました。

そして天平15（743）年、全国で、お経を唱える国家的イベントを強行しました。皆万呂さんは、そのイベントに参加したことを木の札に記したわけです。些かこじつけが過ぎますが、奈良時代のエピソードと現在の世相、似ているようないないような…。

表紙の1枚

1月に行った2019年度の土器づくり上級編では、作った土器の表面をペンガラで赤く塗りました。焼き上げる前は鮮やかだった赤色は、焼いている途中は黒味がかかり、火の中から出すと、また少しずつ鮮やかな赤色に変化していきました。土器をつくった皆さんも、焼きあがった土器の色合いに目を奪われていたようです。

実技講座 『大堀相馬焼に 挑戦』

引き継がれてきた、大堀相馬焼
300年の技術を体感しません
か。

文：廣川 紀子（主任学芸員）



板づくりによる作品
(イメージ)

おおほりそうまやき
大堀相馬焼は昭和53年(1978)に国の伝統工芸品の指定を受けています。馬の絵が描かれた、ひび割れのある厚手の湯飲み茶わん…、幼いころ、父や伯父たちが好んで使っていたことを思い出します。福島県民にとってのお馴染みの器です。

この器の流れをくむ相馬焼は、相馬藩士^{はんがいきゆうかん}の半谷休閑が創始といわれ、現代までの300年もの間、伝統や技術が継承^{けいしょう}されて発展しています。

まほろんには、この近世から近代にかけての隆盛期の相馬焼の資料が収蔵されています。今回の実技講座では、大堀相馬焼協同組合の山田慎一氏〔いかりや窯〕をお迎えし、その収蔵資料にも残される伝統的な技術、手法を使って、本格的な大堀相馬焼づくりに挑戦します。はじめに、参加者の皆さんには、相馬焼の歴史や資料に触れ、作品づくりのイメージを膨らませていただきます。第1回目には印花^{いんか}を制作し、それを使って第2回目には器の表面に型押しして模様を描きます。作品は、ロクロによる水挽き^ひと粘土板を使った成形の2つの器を作ります。その後、講師が施釉^{せゆう}を行い、第3回目には相馬焼を代表する駒絵などの絵付けを行って仕上げます。希望者には、イチチンによる筒描きも可能です。

東日本大震災により、多くの窯元は産地名である「大堀」(浪江町大堀地区)を離れて生産を続けています。講座を通して、先人たちの技術の高さを知るとともに、それらを守り伝えていることへの敬意と、このような文化財に対して改めて考える機会になればと思います。皆さんのご参加をお待ちしています。



うしろだ どびんふた
後田A遺跡出土土瓶蓋

- 日時 ①令和2年6月28日(日)
10:00～15:00 【印花づくり】
②令和2年7月12日(日)
10:00～15:00 【成形】
③令和2年7月19日(日)
10:00～12:00 【絵付け】

体験料 4,000円(予定)

※原則3回の参加をお願いします。

※新型コロナウイルスの流行状況によっては、開催しない場合もあります。ご了承ください。

『電気がない時代の家にミニ 行灯を灯して』

文：和知 千紘(学芸員)

夜の日本列島を宇宙から撮影した写真を見たことはありませんか？

東京などの大都市を中心に地方に至るまで、日本が煌々と電気で発光しているように見えます。

でも電気がなかった時代の日本の夜を上空から見ると・・・もしかして真っ暗だったのかな？

さて、まほろんでは、昔の暮らしや技術に関するメニューを年間を通じて体験する子ども向けの体験講座があります。その名も「森の塾」。

今年のテーマは「明かり」。

「行灯」に使われるなどした明かりの燃料「菜種油」を使って灯明皿に明かりを灯していく実験をし、最後はミニ行灯を作っていく予定です。

実際に私が作ったミニ行灯を復元住居で灯してみると・・・とって

もいい雰囲気♡このような温かみのある小さな小さな光がぼつりぼつりとあつたのでしょうか。

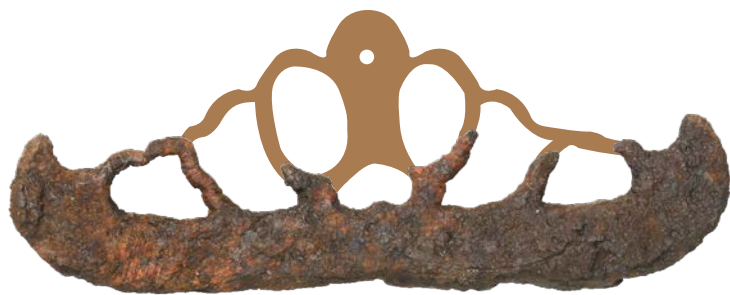
小さな明かりでも、暗闇の中を歩く人には安心を与えてくれたのかもしれませんね。



特別な？ 火おこし道具

透かしの装飾がある、火打金を紹介します。

文：鶴見 諒平（副主任学芸員）



装飾のある火打金
(下郷町瀧ノ入遺跡、欠損部分はイメージ)

時代の初め頃に、同じような火打金があることがわかりました。瀧ノ入遺跡で見つかった火打金もその時期のものだと考えられます。

その珍しいデザインに注目してみると疑問点があります。このような形の火打金は実際に使われていたものだったのでしょうか？使い続けていると、透かしのある部分が簡単に折れてしまうのではないかと感じます。ほかの事例はどう考えられているのか調べてみると、普段の生活で火をつけるのに使う実用的なものではなく、儀式などの際に使われたものではないかという説がありました。確かに儀式のときに使うだけなら、きれいにデザインした火打金が悪く壊れてしまうことも少なかったかもしれません。

もしかしたらこの火打金の持ち主も、儀式や祭りのような特別な場面で使うための道具として、大切にしていたのかもしれません。

今回紹介するのは、下郷町にある瀧ノ入遺跡から見つかった火打金です。

マッチ、ライター、ガスコンロなど、現代には火をつけるための道具が多くあります。昔の人も、もみ切りに使う火きり杵と火きり臼、火打金と火打石など火を起こすために色々な道具を使っていました。その中で、火打金は飛鳥時代ころから日本でも使われ始めたと考えられています。

火打金と一口に言っても様々な形のものがありますが、瀧ノ入遺跡から見つかった火打金は、少し珍しい形をしています。

火打石に打ち付ける箇所の上に透かしの装飾を加えたデザインです。初めて見るデザインだったので、最初は、火打金だとはわかりませんでした。

福島県では奈良時代以降の火打金が多く見つかっていますが、このようなデザインのものは他に例がみつかりませんでした。そこで、日本各地の事例を調べてみると、平安時代の終わり頃から鎌倉時代

まほろん掲示板

4/11 (土) ~ 5/10 (日)

企画展「ふくしま鉄ものがたりII」

6/6 (土) ~ 8/30 (日)

特別展「ふくしま発掘最前線

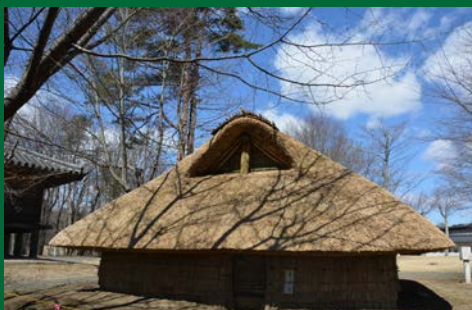
— 十三遺跡記 —

9/26 (土) ~ 12/13 (日)

企画展「阿武隈川と古墳時代 (仮称)」

2021/1/23 (土) ~ 3/28 (日)

企画展「磐梯山麓の縄文中期 I (仮称)」



奈良時代の家の屋根がきれいになりました

★行事名・日程は変更になる場合があります。

編集後記

まほろん開館20周年まであと1年です。今年度はそれに向けたブルインスタグラムも開設しました。皆さん、そちらもぜひよろしくお願ひします。

まほろん
通信
vol. 75

令和2年4月15日発行

開館時間 9:30 ~ 17:00 (入館は16:30まで)
休館日 月曜日 (月曜日が祝日・休日の場合にはその翌日ですが、GWとお盆期間中は開館します) / 国民の祝日の翌日 (土・日曜日に当たる場合は開館 / 年末年始 (12月28日 ~ 1月4日))
入館料 無料 (体験学習の内容によっては、材料費が必要な場合があります。)

お問い合わせ



〒961-0835 福島県白河市白坂一里段 86

☎ 0248-21-0700

fax 0248-21-1075

ホームページ

まほろん

検索

